



「高齢者のストーリーカー行為は珍しくない」とNPO「ヒューマニティ」の小早川理事長

# するシニアたち

「恋は遠い日の花火ではない」。そんなコピーの人気CMがあった。相手の気持ちを尊重するの  
が大人のマナー。けれど人生の終盤に差しかかり、かなわぬ恋に妄執する高齢者は少なくない。  
「彼女を幸せにできるのに」「彼に弄ばれた」。独りよがりな思いを抱いて、暴走する――。

実は男がストーリーカー規制法違反に問われたのは3回目になる。過去の2回はこの被害女性の「母親」に対する事件で、それぞれ懲役4月、9月の実刑判決を受けている。今回は「娘」が標的になったのだ。

男が刑務所を出て9カ月後のことだった。

男は結婚歴がなく、出所後は独り、都内の簡易宿泊所に身を寄せた。「あの人はどうしているのか」と気になってたまらなくなり、気付けば母親の居住地に向かっていた。そこは、かつて男が住んでいたアパートでもあった。ご近所さんだった2人は、共に信仰する宗教の集まりで知り合ったという。

だが、出所して久しぶりに見た憧れの母は「思ったより年老いていた」。けれど、たまたま見かけたその娘は「母親にそっくりで、若くてきれいだった」とい

置いたこともある。

検察官に「女性と会うために『〇〇』に来てください」といった手紙を何度も送っていますよね」と聞かれる

と、男は「でも来てくれなかった」とつぶやく。「なぜだろう」と検察官が畳み掛けると、「怖かったからだと思う」と漏らした。女性に届けたポーチなどは「拾ったものだ」という。

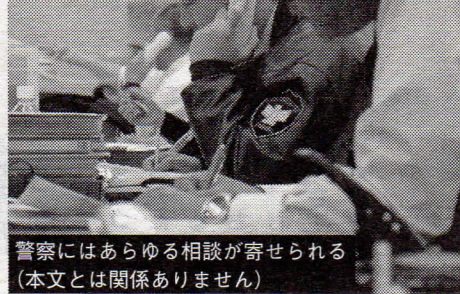
「彼女が（警察に）訴えてくれたおかげで、今ここ（法廷）にいる。俺のために『反省しろ』と、感謝している」と、男は頭を下げた。

裁判所は男に懲役10月の実刑判決を言い渡した。

今年2月、東京地裁の法廷にひとりの男（68）が立った。問われている罪はストーリーカー規制法違反だ。「彼女の気持ちを（自分に）向けさせようとしたの？」弁護士に「はい。手紙や物を送った」と答えた。

起訴内容によると、男は昨年12月上旬、6日間にわたり好意を寄せていた女性（35）の自宅を訪問。「結婚したい」などと書いた手紙を郵便受けに差し入れた

り、成人雑誌から切り抜いたヌード写真を玄関ドアに貼りつけたりした。贈り物として、女性用のポーチやスカートなどをドアの前に



警察にはあらゆる相談が寄せられる  
(本文とは関係ありません)

# 恋は「最後の花火」か 「ストーリー化」

う。男は「交際したい」「結婚したい」と思うようになった」と打ち明けた。

「母へのつきまといで2回刑務所に入っているにもかかわらず、今回は娘の私に。男が自宅の周りにいると思うと、不安でたまらない。できるだけ長く刑務所に入ってほしい」

被害に遭った娘の調書を検察官が読み上げた時、男はうつつむきながらこぶしを固く握りしめた。

弁護士によると、男は前回の裁判で、母親から遠くへ離れるため、出所後は「福島にボランティアに行く」と誓っていた。だが、誓約はほごにされた。

「(男は)自分を大きく見せてしまおう」と弁護士は言う。「俺は、歌はプロ並みにうまい。性格は高倉健並みに男気がある」。男が娘に宛てた手紙には、そう書いてあったという。

「ストーリー行為に及ぶ高齢者は多い」

ストーリー化に関する相談を受け付けているNPO法人「ヒューマニティ」(東京都大田区)の理事長、小早川明子氏はそう指摘する。これまでに500人以上の被害者、加害者と向き合ってきたが、「ここ数年は全体の2、3割が60、70代になった」という。「加害者がシニア世代であることは、もはや珍しくない」

## 「人生でやり残したのは恋愛だけ」

増加の背景には、いわゆる「団塊の世代」の存在が大きい。この世代ならではの氣質が、ストーリー行為につながりやすいという。

「学生時代は受験戦争、社会人になってからは出世競争と、いつも競争ばかりだった。仕事一筋で家庭を顧みず、定年を迎えた時には家庭内に居場所がない。高

ことを実感している。警察庁のまとめによると、2014年に警察が認知したストーリー化事件(2万2823件)のうち、つきまといなどに及んだ60代以上の割合は9・6%(2199件)。5年前は8・9%(1435件)だった。

「高齢者のストーリー化行為は昔からありました。超高齢社会となり、認知件数が増えているのでしょう」(小早川氏)

度成長期を支えたという自負や「男尊女卑」の価値観が根強く、地域社会にとけ込めない。独りぼっちなんです」(同)

小早川氏によると、「人生でやり残したのは恋愛だけ」と口にする高齢者は多い」という。一般的に多様な恋愛観が認められる時代ではなく、「親族が勝手に

縁談を進めた」「何となく身近な相手と結婚した」というような世代で、「心身とも焦がれるような恋愛は未経験」と打ち明ける高齡者は少なくない。このため、「人生の終盤に差し掛かった焦りから、目についた異性に『最後の恋』とばかりに執着する」――。

◇ 『常連のおじいさん』としか思っていなかったのに……

中村恵美さん(33) 〓 仮名〓は、70歳の男性客との一件を困惑しながら振り返る。男性は中村さんが勤める喫茶店に、一人で毎日のように朝食セットを食べに来ていたという。

「まだコップに水が入っているのに、おかわりを求めたりする。会計を済ませた後に、おしゃべりが延々と続く。お客さんだから邪険にできず、笑顔で応対していたのですが」(中村さん)

そのうち、男性は店に来るたび、中村さんに花束を手渡すようになった。当初は店の花瓶に生けていたが、量が多すぎるためやりわりと断ったところ、中村さんの自宅に届くように。「以前、おじいさんだからと安心して住所を教えてしまっていた」という。

オートロック方式の共同玄関だったため、直接部屋に押しかけられることはなかったものの、中村さんの夫が気分を損ねるようになった。「夫は初めこそ苦笑いしていたのですが、しばらくして『今より幸せにしてあげる』といった手紙が添えられるようになったのです」(中村さん)

中村さんは「(夫の)給料が安い」などの不満を、男性に愚痴ったことがあった。とはいっても、店員と常連客との間の「その場を盛り上げるための軽い無駄口」に過ぎなかった。

中村さんは正直、迷惑に感じたが相手は常連客である。言葉を選びつつ、花束を届けたり、手紙を送ったりすることを控えてもらいうる訴えたものの、態度は変わらない。やむなく厳しい言葉で拒絶の意思を伝えたとところ、受け入れてもらえないと知った男性の態度が一変、攻撃に転じた。

前出・小早川氏は言う。「女性からの親切や思いやりを『自分への好意』と勘違いして、『こうあってほしい』という妄想を織り交ぜながら、自分本位の物語を作ってしまう。現実の交際には至っていないのに、勝手な思い込みから『裏切られた』と逆恨みして、ス

合いの弁護士とともに、店に来た男性と話し合った。「私なら可哀そうな彼女を幸せにできる」と男性はひたすら訴えたが、弁護士らによる説諭で男性は反省の態度を示すように。「怖がらせるつもりはなかった」と詫びながら、「喜んでもらえていると思ったのだが」と頭を垂れたという。

中村さんは最後の手段として警察への通報も考えていたが、「事件」になる寸前で事態は収束した。

トーカーになってしまおうです。若い人の場合は、実際に付き合っているカップル間で、別れ話がこじれてストーカー化することが多い。世代間で異なる点です」

ストーカー被害者といえど、一般的には女性の印象が強い。だが警察庁の統計では、男性の被害も約1割

ある。女性のつきまといに悩む男性は確実におり、ストーカー相談を受ける現場の実感では、「男性の被害者」もつと多い」という。「16年前から相談を受け始めましたが、加害者の男女比は当初から半々です。男性はあまり警察に相談しないため、数字に表れないだけ」(小早川氏)

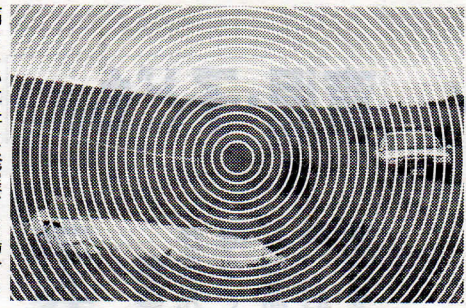
中には高齡の女性ストーカーも少なくない。一例を挙げよう。荒木三郎さん(73) 〓 仮名〓は、66歳の女性から半年に及ぶ執拗なつきまといを受け、「心底、脅えた」という。知り合ったのは婚活パーティーだ。「きれいな女性だ」と思った荒木さんは、2度ほど一緒に食事をしたものの、「将来を考えられる相手ではない」と思い直し、交際を続けることをやめた。

けれど、「もう連絡しないでほしい」と伝えても、

携帯電話や固定電話は鳴りやまなかった。女性からの着信を無視することに決めたところ、ある日の昼下がり、パトカーと救急車が荒木さんの自宅に押し寄せた。

「実は、女性から『荒木さんが』孤独死しているかも』という通報があったのです」と、荒木さんは振り返る。女性は警察官らに「自分は婚約者」と名乗ったという。婚活パーティーの主

催団体を通じて女性に注意をしてもらったが、「女性は『私は弄ばれた』と言っ



痛ましい事件に発展する場合も(本文とは関係ありません)

たそうです」(荒木さん)。

前出・小早川氏もこんな相談を受けたことがある。

60代の女性は、通っているテニススクールの20代の男性講師に「他の女性に(テニスを)教えるな」などと書いたメールを毎日何十通と送った。男性が一貫して無視したところ、女性は知るはずがない平日の勤務先に訪ねて来るようになった。

実は相談してきたのは当の女性だった。「男性が冷たくなった」と嘆き、「その理由がわからない」と首をかしげた。男性はアルバイト先だったテニススクールと本来の職場、二つの職場から離れざるを得なくなったという。

「自分を、被害者」と思い込む女性が多い。「こんなに好きなのに」との思いが、被害者意識に転嫁する」と小早川氏はみる。「彼が気持ちを理解してくれない」

「本当はまだ自分のことが好きはずだ」と思い込み、冷たくされた自分こそが被害者、と主張するという。

年齢に関係なく、女性ストーカーは「相手は」私を愛すべきなのに(愛されていない)という不満が強い。「愛し合っているのに」と思い込む男性と大き

## 「恨みの中毒症状」には治療が必要

く異なる点だ。その差異は加害行動に現れる。

「男性は『別れたら許さない』と脅す。一方、女性は『あなたには私しかないのに』と恨みながら諭す。だから、多くの場合、男性は『殺してやる』と言い、女性は『死んでやる』と言います」(小早川氏)

警察庁は昨年度、ストーカー規制法に基づく警告などを受けた加害者に精神科の受診を勧めるなどの対策を試みている。ただし、受診は強制ではなく、治療を受けるかどうかはあくまでも加害者次第だ。

によれば、カウンセリングによって思い込みと現実とのギャップを認識させ、思考の歪みを変える「認知行動療法」などを行う。

精神科医の福井裕輝氏は「ストーカーは一種の精神疾患」と捉える。加害者は「恨みの中毒症状」に陥っているため、治療が極めて重要になる。福井氏の著書『ストーカー病』(光文社)

加害者は内面では「こんなことを続けたくない。自分を変えたい」と苦しんでいるという。福井氏は相手の言い分を全面的に聞き、

「あなたの苦しみを終わらせるために、今の状況を変えていったらどうですか」などと働きかける。被害者だけに向かってきた意識が

仕事や家族などに向かうようになり、改善の兆しが見えるようになるとしている。

前出・小早川氏は「認知行動療法などが効かない、行動の制御に障害があるストーカーには、服役中でも釈放された後でも入院を前提とする治療を強制するべきです」と言う。

ただし、欧米では強制的な治療が導入されているが、日本では「人権侵害」との批判も根強く存在する。治療が犯罪防止の切り札になるのか否か。警察庁の有識者検討会が昨年8月にまとめた報告書には、「更生プログラムの実施を検討すべき」とあるだけで、具体策は盛り込まれていないのが現実だ。

人生でやり残したのは恋愛だけ——シニア世代向けの恋愛・セックス情報が溢れる社会の片隅で、熾火のような妄執が渦巻いている。